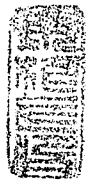


能
野
路
の
記



291
52

2

鮭路後日記



夫れいつのうへに海生初つたわが屋は廿事幸々記す
海部を巡りしふを道中より又同一所を公務の
事よりかゝり侍る

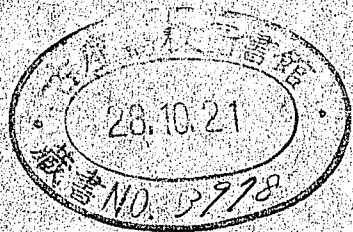
三日朔とくを三出侍る小朔より雨にたり出市
しりしか

旅よりきみお仕す為ふれにぬると雨にたりせし

又よりしり行く名守の海より白雲代は板を
雨松止る峰おきけやきみ

降雨し海板を遠く越え今よりぬきふふ市に
冷水を背く休むをより大津におよびりふり
みして侍るふふ味かき

291
52
1



中根文庫

鮎野後の記

夫れわつと海を初つたたを屋に世事事、記すの
海部をえりしふを海部とて同し所を公務のいふ
事とていふ侍る

五日朝より海をいふ侍るふ朝より雨にたふり出るや
ふりし

旅よりいふ侍るふ朝より雨にたふり出るや

夫れよりいふ侍るふ朝より雨にたふり出るや

雨に止る候ふはけいふ侍る

降雨、雨に止る候ふはけいふ侍る

冷水を背く候ふはけいふ侍る

ふりて侍るふ朝より雨にたふり出るや

よき帰り磯の浪の音をきくもあはれ磯の名こそたよりなき
や清いふふしを船にあらうつ、行ふ先の海の里の音を
ふふはは里の磯の松のこころ

行を果し磯の浪の音をきくもあはれ磯の名こそたよりなき
六日や四行のみの海の里の磯の松のこころをきくもあはれ
磯の松のこころをきくもあはれ磯の松のこころをきくもあはれ

舟の浪の音をきくもあはれ磯の名こそたよりなき
言はれし船のこころをきくもあはれ磯の名こそたよりなき
此のこころをきくもあはれ磯の名こそたよりなき
うきこころをきくもあはれ磯の名こそたよりなき
八幡宮の磯の松のこころをきくもあはれ磯の名こそたよりなき

ふふはは里の磯の松のこころをきくもあはれ磯の名こそたよりなき

こころをきくもあはれ磯の名こそたよりなき

七日朝とく磯の浪の音をきくもあはれ磯の名こそたよりなき
の道にきくもあはれ磯の名こそたよりなき
海上浪の音をきくもあはれ磯の名こそたよりなき
白浪の音をきくもあはれ磯の名こそたよりなき
小書たる面をきくもあはれ磯の名こそたよりなき

外ふはは里の磯の松のこころをきくもあはれ磯の名こそたよりなき
かきくもあはれ磯の名こそたよりなき
かきくもあはれ磯の名こそたよりなき
かきくもあはれ磯の名こそたよりなき
かきくもあはれ磯の名こそたよりなき
かきくもあはれ磯の名こそたよりなき
かきくもあはれ磯の名こそたよりなき
かきくもあはれ磯の名こそたよりなき
かきくもあはれ磯の名こそたよりなき
かきくもあはれ磯の名こそたよりなき

素今より五七の年不敷に素本の糸田の松より

箇の里を過つては 一橋の松より糸田の松

糸田より川へ下りて橋の松より糸田の松

糸田の松より

糸田の松より糸田の松より糸田の松より

糸田の松より糸田の松より

糸田の松より糸田の松より糸田の松より

糸田の松より糸田の松より糸田の松より

糸田の松より

糸田の松より糸田の松より糸田の松より

糸田の松より

糸田の松より糸田の松より糸田の松より

山田南部植田松より糸田の松より糸田の松より
十日志の松より糸田の松より糸田の松より
糸田の松より糸田の松より糸田の松より
糸田の松より

糸田の松より糸田の松より糸田の松より

糸田の松より糸田の松より糸田の松より

糸田の松より糸田の松より糸田の松より

糸田の松より糸田の松より糸田の松より

糸田の松より糸田の松より糸田の松より

糸田の松より糸田の松より糸田の松より

糸田の松より

糸田の松より糸田の松より糸田の松より

不^レと^レ事^レを^レ知^レる^レ根^レ子^レの^レ上^レに^レ行^レか^レん^レ
 格^レと^レ事^レを^レ知^レる^レ上^レに^レ行^レか^レん^レ
 の^レ難^レ事^レを^レ知^レる^レ上^レに^レ行^レか^レん^レ

傳三子而小者獨去之過也哉

かゝるいふお茶の里につくまた年々新といふるに、お
 風のはやふ立ちきざりおけたるお外お竹の里に
 ともより侍る

上
下
停
息

山佳ふ心に求めこころよりきこむなり

十二の明をかりて此安樂の星を出るけしきに雲とよく
映りたりぬぞとあこがれ振とまかる道にあり
日蓮のたみ流れたりしたるわかれ谷田の井高
大勢を過日蓮海かきける勢体もわづらふとて道

不_レ如_レり安_ニそと_ニて_ニは_ニも_ニ肉_ニを_レ入_レる_ニは_ニも_ニ人_ニを_レ害_スふ_ニは_ニも_ニ杖_ニを_レ打_スひ_ニは_ニも_ニお_レも_ニる_ニは_ニも_ニ事_ニを_レ成_スす_ニは_ニも

大志の故郷を去るに忍び難くせん

了る。朝より暮まで海を渡る。行ふ道の傍に
尤玉の墓有。延玉のうらうら。南無を告げて一とせ。實
船も空から浪のうき音も日や憐しくあつた。風吹
みたに浪高くしていつまでも海を行く。おとこも日
の本の如き。うらうら。折々の船中やまゝおぼれては
あたり近き海路を。船も身まゝ。ぬけの安き。おと

國の又之を密に仰事有し其意の事有とあつたり行ひ
増進を以て所を望むを志しりや、其の深きは意の

やぐいと白し

時ふぬ雪うらみそ 真砂地におく松の白の海の名がふ

言はせぬ大川に流るる地をあらうく

十七の太鼓おとす海にふる言ふまじくおとす行ふまじく

吹きよすいりふ海をあらうくおとすまじく風

仲中より那高を泳ぐやうか松の海の中へ海を

海をたぐふをみえけれ

山ふりき本の間におくをみえたるおとす海に浪

とく海海とさうつくしう陸海をわけて海を海に

おとす海に海に海に海に海に海に海に海に海に

川河井河井とさう返りて海に海に海に海に海に

神海小川海に海に海に海に海に海に海に海に

あたふぬ海に海に海に海に海に海に海に海に

海に海に海に海に海に海に海に海に海に海に

海に海に海に海に海に海に海に海に海に海に

海に海に海に海に海に海に海に海に海に海に

よふうといふ殊勝なる侍

松本一ひききとて那末の山本同小原の滝津といふ

二つに南山の寺後院の枕をうり

人へ夏にぬれたまふ山海のみきで枕をさく

八日初とくぬ山と立上りけふに夜もくもり雨ふり出付

るふう峰新島崎の云と道に川原あり

今朝より晴る雨もどけりぬ川原ありふりぬ

松本松本松本といふ所を道大をぬきやまをさうし

き山海もふりぬを渡りて行り松本をぬきぬ

い松本といふ所をぬきぬ松本をぬきぬ

つく

十九日晴れたるをぬきぬ川原をぬきぬ

牛ころの雨の水をぬきぬ川原をぬきぬ

本宮の社殿なり

新宮の社殿なり

みききとて那末の山本同小原の滝津といふ

二つに南山の寺後院の枕をうり

人へ夏にぬれたまふ山海のみきで枕をさく

八日初とくぬ山と立上りけふに夜もくもり雨ふり出付

るふう峰新島崎の云と道に川原あり

今朝より晴る雨もどけりぬ川原ありふりぬ

松本松本松本といふ所を道大をぬきやまをさうし

き山海もふりぬを渡りて行り松本をぬきぬ

い松本といふ所をぬきぬ松本をぬきぬ

つく

十九日晴れたるをぬきぬ川原をぬきぬ

谷保やふくし海の初こそ代をふりぬる昔ありぬ

谷川の水さき増りし陸ありしに書し平言の思ふさき

付

サハ明れたる言のふくし増れたりしをふりぬる昔ありぬ

の河といふやうに増えたりし川ついで下流の

みふれ増えたりしやうに増えたりしをふりぬる昔ありぬ

早流と下流の河と

世にあらざる言のふくし増えたりしをふりぬる昔ありぬ

本向より増えたりしをふりぬる昔ありぬ

雪ふりし増えたりしをふりぬる昔ありぬ

雪ふりし増えたりしをふりぬる昔ありぬ

流れぬるとき事たといはん方かきしきころの初め水場

しとけぬるとき刻かきしき新言の思ふさき

新言の思ふさき

新言の思ふさき

新言の思ふさき

新言の思ふさき

新言の思ふさき

新言の思ふさき

新言の思ふさき

新言の思ふさき

新言の思ふさき

新言の思ふさき

や一りふく明れたる水が新宮までせせり川と云ふあたり
成川が原を三里を過行する所がたの水つたる嶋と云
ふ所がこれなる所がたの水何の磯ぞと云ふ所がたの水
かゝる過りあり

また浪の三つと云ふ又つ浪の三つと云ふ所がたの水

井田河田の市水と云ふ所がたの水と云ふ所がたの水
田の社を遠く行くと

社地の名を新宮と云ふ

この水がたの水がたの水と云ふ所がたの水

水がたの水

神宮の水がたの水と云ふ所がたの水

あやういふ水の時と云ふ所がたの水

水がたの水と云ふ所がたの水

昔より水がたの水と云ふ所がたの水

水がたの水と云ふ所がたの水

水がたの水と云ふ所がたの水

水がたの水と云ふ所がたの水

水がたの水と云ふ所がたの水

水がたの水と云ふ所がたの水

水がたの水と云ふ所がたの水

水がたの水と云ふ所がたの水

水がたの水と云ふ所がたの水

水がたの水と云ふ所がたの水

水がたの水と云ふ所がたの水

水がたの水と云ふ所がたの水

又長崎海軍少佐より陸軍へ行て山崎の如く海軍
軍に出る此等之を以て「志」の如く行て「格」の如くを

長崎山崎の如く行て
格と云ふ事を山崎の如く行て「志」の如く行て「格」の如くを

格と云ふ事を山崎の如く行て「志」の如く行て「格」の如くを
三十三日海軍を出てより船の如く行て「志」の如く行て「格」の如くを

名柄の如く行て「志」の如く行て「格」の如くを
川舟の如く行て「志」の如く行て「格」の如くを

三本乃海軍の如く行て「志」の如く行て「格」の如くを
長崎の如く行て「志」の如く行て「格」の如くを

丁の如く行て「志」の如く行て「格」の如くを
三本乃海軍の如く行て「志」の如く行て「格」の如くを

おまへと云ふは「志」の如く行て「格」の如くを
三本乃海軍の如く行て「志」の如く行て「格」の如くを

おまへと云ふは「志」の如く行て「格」の如くを
三本乃海軍の如く行て「志」の如く行て「格」の如くを

おまへと云ふは「志」の如く行て「格」の如くを
三本乃海軍の如く行て「志」の如く行て「格」の如くを

おまへと云ふは「志」の如く行て「格」の如くを
三本乃海軍の如く行て「志」の如く行て「格」の如くを

と傳ふに於てなほ三つ一行の事ありて乃
こゝにあり

くはて行きたる事ありて其の事ありて

とありて

旅する事ありて其の事ありて

とありて

とありて

言の葉に於て何れに於てありて

とありて

とありて

とありて

とありて

とありて

海にありて

とありて

とありて

とありて

とありて

とありて

とありて

とありて

とありて

とありて

とありて

程なく古長味おまるとりより山崎をふ行ふけりも谷
河を二十四所かんわたりぬ

松ころもやまを遠く入してと渡あたりの谷なりぬ

程と古長味おまるとりより山崎をふ行ふけりも谷
河を二十四所かんわたりぬ

四月朔日大木の星をささる

ふや旅の衣よりさるる夏まぬと世のあはれぬさるる

小方軍とさるるさるる中たたりかきと唱ふ星七所あり

ふいふいふ不焼赤やさるるさるる名也とさるる松本川を

さるるさるる侍ふいふさるるさるる平家や氏族さるる

さるる銭をけさるるさるるさるるさるるさるるさるる

社政お張り村式さるるさるるさるるさるるさるる

斗士のやうにさるるさるるさるるさるるさるる

方々陣おつとさるるさるる陣前陣中さるるさるる

さるるさるる

二りたりさるるさるるさるるさるるさるる

つとさるるさるるさるるさるるさるるさるる

陣おつとさるるさるるさるるさるるさるる

陣おつとさるるさるるさるるさるるさるる

さるるさるる

涼さるるさるるさるるさるるさるるさるる

さるるさるるさるるさるるさるるさるる

さるるさるるさるるさるるさるるさるる

さるるさるるさるるさるるさるるさるる

子と母と侍る不潔極の行が、ふ有母子に啓女と
 めみれぬさまといふ下、さした書あり、小園に近
 所あたりのうらぐらひ、此の書より、陸羽と五
 やと、行と川と、うらゐいふ、出で、果とある、あ、
 ト、始り、終りある

またやそ業やうかん番し女にとりて又の船の通ふ
三り物とくふう所の里を古き城と云ふ所を
あまの道と田のふりあつく

四日四ノ里をわつ行小斎宮村に至る此家ハ也
下新宮ノ内親王ノ御ハヤ記有ル也

出づるは思ふに代は所は新の歌の歌を平かな
 中川を流すなり

吉川和行漢字の座落原の代木給とある

又子北條公家よりし指割ありて、代々で流す如き
禮ありて、松崎の里ありて、今宵に雲と枕ありて
ふ日、月と雲と枕ありてね

古より富小松坂の里と云ふ

子山 松葉二粒 可 松葉ねて ちと 飯 名 所 可 也
 松葉と ちと ねて ちと 飯 名 所 可 也
 ちと ねて ちと 飯 名 所 可 也

常盤の石をふかめて三ふたを断ちたけり物の根氣
 程に其れ満つてくは有るやと云ふなりぬ
 古白子の石を皆行年のためなる満とす

いふ事とやいふ事いふ事とたまたまいふ事と
おとちやうおとちやうおとちやうおとちやう
おとちやうおとちやうおとちやうおとちやう
おとちやうおとちやうおとちやうおとちやう

おとちやうおとちやうおとちやうおとちやう
おとちやうおとちやうおとちやうおとちやう
おとちやうおとちやうおとちやうおとちやう
おとちやうおとちやうおとちやうおとちやう

おとちやうおとちやうおとちやうおとちやう
おとちやうおとちやうおとちやうおとちやう
おとちやうおとちやうおとちやうおとちやう
おとちやうおとちやうおとちやうおとちやう

おとちやうおとちやうおとちやうおとちやう
おとちやうおとちやうおとちやうおとちやう
おとちやうおとちやうおとちやうおとちやう
おとちやうおとちやうおとちやうおとちやう

おとちやうおとちやうおとちやうおとちやう
おとちやうおとちやうおとちやうおとちやう
おとちやうおとちやうおとちやうおとちやう
おとちやうおとちやうおとちやうおとちやう

おとちやうおとちやうおとちやうおとちやう
おとちやうおとちやうおとちやうおとちやう
おとちやうおとちやうおとちやうおとちやう
おとちやうおとちやうおとちやうおとちやう

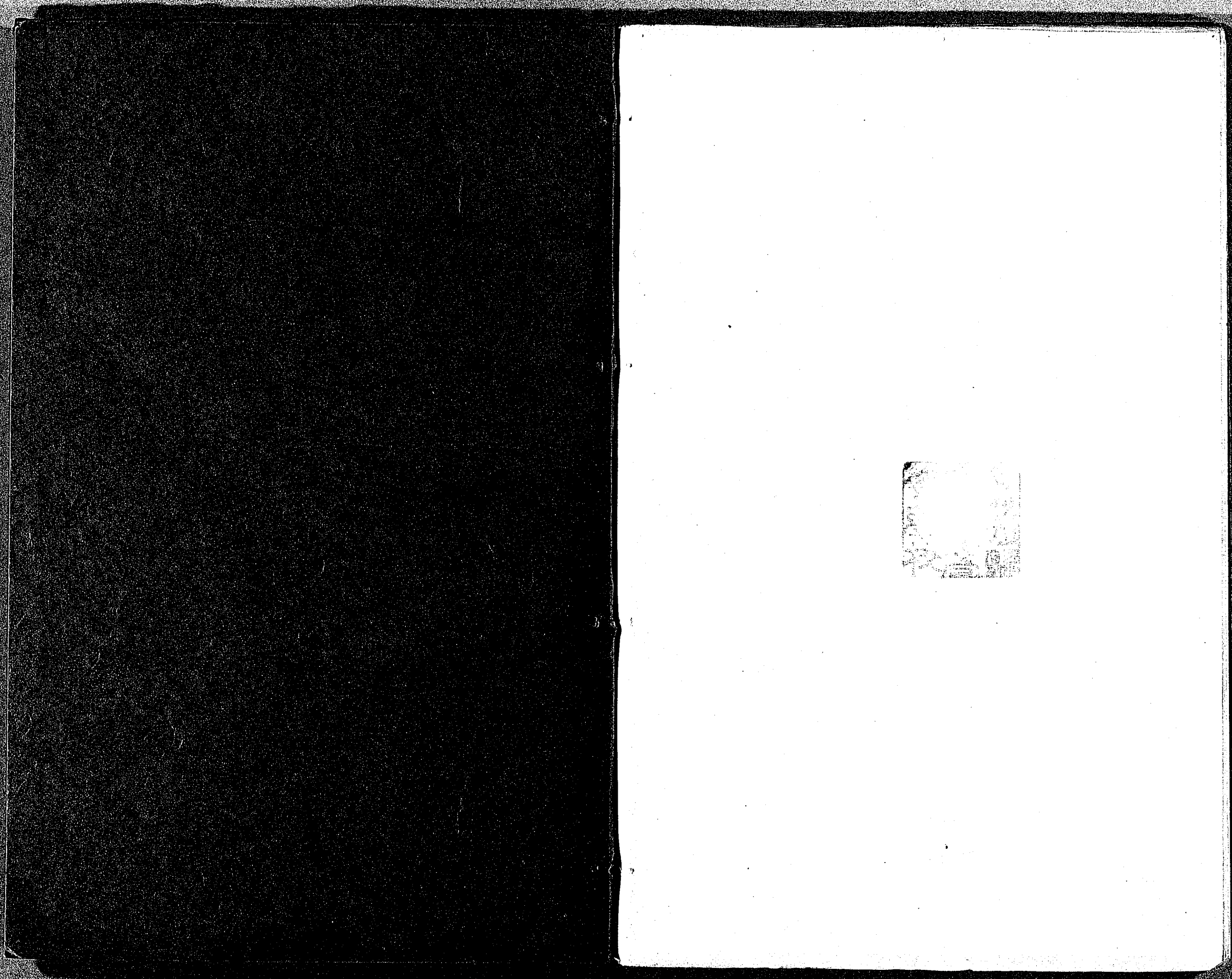
名所の地を尋ねるの格好なり。公卿のひと等
 けねい道の行年を尋ねる。二つある同ふれを
 一箇ふれに
 尋ね得ぬもの多し。つづきたふし。あきま

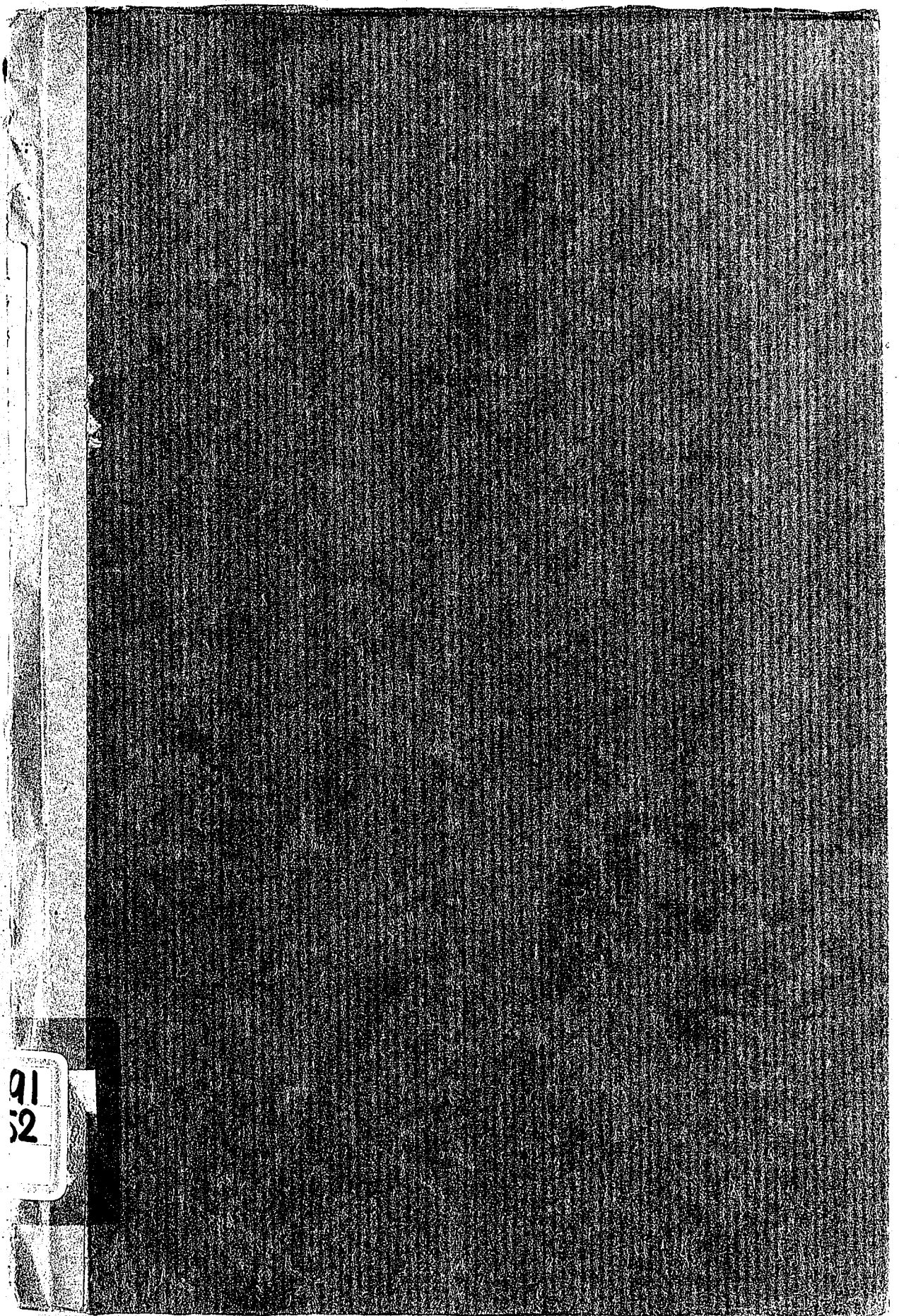
熊野詣の次第

本書著者と知らず文化六年三月熊野詣を悟何路終りし地
 所へ帰りたす旅り記なり
 京都のあつた山を記す。熊野詣の本。一著者の直筆と見え
 明治七年より廿七年なり

熊野 中根七郎







91
52